



Title	中国古代思想にみる「三」の機能構造：方位観念における中心定位に立脚して
Author(s)	杜, 勤
Citation	大阪大学言語文化学. 1997, 6, p. 91-104
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78094
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中国古代思想にみる「三」の機能構造

—方位觀念における中心定位に立脚して—*

杜 勤**

中国の文献資料中常々記録着某種定型性的数值、這些数值不僅僅是單純的对事实的羅列、而是在表現一種象徵性的價值。在這些数之中、「三」(包括其倍数在内)是出現頻度最高的数。本文從中国人固有的方位觀念中的中心定位的角度出發、考察奇数式和偶数式這二種人類所具有的最基本的認識類型的異同。併在此基礎上、從宇宙生成的模式、道教的思想根源的聯係上進一步探求「三」的重要意義和結構機能。

对宇宙空間的分割、尽管有各種各樣的分割法類型、然而都源於二分割和三分割。因此作為被分割的宇宙空間的格局、二極構造和三極構造為其最基本的模式。這二種構造是人類空間思惟的最基本的形態概念化的表象。進而把偶数構造列和奇数構造列加以对比、便可以發見這兩者間的區別、即是前者一律可以均等地分割得尽、与此相對、奇数構造列里則常包括一個不可能再分割的「一」以象徵「中」的概念。因此可以說奇数構造列是偶数構造列上添加了「中」的要素、是一種中心存在型的宇宙觀。此時的「一」有異与作為混沌未開的原始狀態的象徵数的「一」、它以單一形式出現、抽象化地標誌着各維度空間意識的中樞、宇宙秩序的根本。併且、偶数構造常常揭示的是分割原理、奇数構造則常常揭示作用於偶数構造的統合原理。再者、奇数構造系列中所體現的統合原理綿根結底、均以三極構造作為其母体。

三極構造的統合原理還反映在古代中国的宇宙生成的法則上。『老子』四十二章「道生一、一生二、二生三、三生万物」、用自然数列象徵性地表述了宇宙的創生圖式。在此之所以將万物生成数限定為

* 試論中国古代思想中「三」の機能構造—從方位觀念中的中心定位出發—(杜勤)

** 関西大学非常勤講師

「三」、是因為「三」の出現才使「沖氣」為中心、配之以陰陽兩氣的三極構造得以完成、沖氣調和陰陽二氣、為万物化成提供了必要的条件。從而誕生出有形有色有声的万物。因此可以說、這一宇宙生成論的圖式乃至老子思想的基本模式是構築在三極構造之上的。

1 はじめに

中国の文献史料にはさまざまな数値が定型的に記録されている。それは例えば、「三皇五帝」など特定の人物の統括に関する数値、「三拝九叩」「三綱五常」など儒教社会における倫理的規範の総称としての「礼」に関する数値、「三公、九卿」など官制に関する数値、「三才」、「五行」、「四象」、「八卦」など論理、法規に関する数値、「三人成虎」、「九死一生」など修辭的意味に関する数値など多岐に亘っている。それらの数値は単なる事実の羅列としての域を越えて、なんらかの象徴的価値を体现するものであると理解すべきであろう。これらの象徴的価値を持つ数の中で、その倍数を含めた「三」の出現頻度が最も高いと見受けられる。本稿では、中国人古来の方位観念における中心定位の角度から、奇数式と偶数式という人間の持つ二種の基本的認識類型の相異を考察し、さらにその上で、宇宙生成の原理など、古代思想の根幹にかかわる「三」の重要な意味と機能の究明を目指すとする。

2 方位概念の中心定位に見る数

象徴的価値を持つ数の世界の中で「三」自身はもちろんであるが、その倍数の出現する確率も「一」以外のあらゆる自然数の倍数を遥かに超えている。本来ならば、自然数の系列において、二つの数のうちの一つは「二」の倍数である。これに対して、「三」の倍数は三つの数のうち一つある。つまり、「二」の倍数の貯蔵量は「三」の倍数の1.5倍になると推算できる。しかし、事実の上では「三」の倍数の使用量は「二」の倍数の使用量の十倍以上にも上ると言われている¹⁾。この現象は中国人がいかに「三」に執着するかを示すに足りるものである。この節

¹⁾ 呉慧穎著『中国数文化』岳麓書社 1995年 110頁

では「二」から「十」までの自然数の象徴的意味を概観し、そのことから中国古代思想における「三」の機能構造についての考察への足がかりを掴みたい。

2.1 「二」と「三」について

中国では、「二」の具象として天地・乾坤・日月・陰陽・剛柔・男女などの相對するものを考え、陰・陽相對的思考を象徴する数は「二」であるが、「二」の内容として考えられるものはとかく二元論の原形質を示すに止まりがちである。それらはいわば世界の要素ともいべき存在であって、相對的世界を展開させてゆくための元素を示すものである。

「三」は『説文』一篇上、三部に「天・地・人の道なり。」というように、天地人の三才を象徴する数である。天地間に人間が介在するのは中国の古来の宇宙觀における垂直構造の相である。

陰と陽は易を理解する上での重要な概念であり、一組の對立項である。陰は暗くて重いもの、一般的には下位的、女性的原理を指し、反對に陽は明るいもの、軽やかなもの、一般的に上位的、男性的原理を意味する。そして、陰陽は乾坤によって示され、乾坤のそれぞれの作用について『周易』繫辭上傳では、「乾は大始を知り、坤は物を作成す。」と述べている。つまり乾は物を始める廣大にして完全な働きを司る創造の根本始源であり、万物は乾の陽を取り入れて始めをなすのである。これに対して坤は乾の陽を受けて、それに形を与え完成された物に育て上げていくということである。ところが、『後漢書』劉陶伝に、「天地非人、無以為靈（天地は人にあらざれば、以て靈を為す無し。）」とあり、天地にない、「靈」と称される人の役目を重要視すべきであるという。それは人が陰陽という對立項の分離されている属性を結合している存在であり、天地にとって、不可欠なものである。

仰則觀天象於天、俯則觀法於地、……於是、作八卦、以通神明之德、以類万物之情。 『周易』繫辭下伝

（仰いでは天上における日月星辰の形象を觀察し、伏しては地上における山川草木の物質を觀察し、……かようにして八卦を作り、乾は健、坤は順、震は動、艮は止というように、奥深くして知りがたい八卦の性能に通じ達し、また震は雷、巽は風、艮は山、兌は沢と

いうように、天地万物の状態を八卦に配当してこれを類別した²⁾。

上の意味は聖人は天地自然の象の観察を通じて、陰陽の象と剛柔の形を取り、八卦を制作し、卦画にそれを示したということである。易は天地自然の状況を網羅するゆえに、天地間一切の事柄及び人事の得失を推量し得るというのである。人は天地間における己の存在の使命を自覚し、さらに社会的存在たる自己を見出すべきである。「観象於天、観法於地」の主体はいうまでもなく、易の制作に苦心する聖人である。聖人は人のあり方の範を示したのである。陰陽の変化は宇宙自然活動に現れると同様に、人事活動にも現れる。易の構造は天地自然の理法にのっとって作られたものであるから、易の法則を体得すれば、天地の間に介在し、人たる地位を確立し、天地と並んで天地造化の功を助けることができる。易は人を天地の理法に通達せしめる重要な媒介である。天地の機微に精通する人は天地の中を受けて生まれ、上なる天、下なる地と相並んで、つまり「天地と参にな」って(『中庸』朱子章句第二十二章)、「中」として立つことができるのは人間のみである。聖人が天地の理法に倣って、天地に相應する人間界の秩序を制作したために、天地と同一の運行秩序にある人は天地化育の徳に参入し、宇宙全体と渾然と一体を成すものである。

2.2 「四」と「五」について

「四」は基数の意味のほかに、「よも」「四方」の意味もある。『後漢書』竇憲伝の「然後四校横徂(然る後、四面の校が横行する。)」の注に、「四校は四面の校」とあり、つまり、ここで「四」は単純な実数ではなく、空間の四方位を指すものである。『周脾算経』上経には人々は毎日のノーモン(日時計)の影で日の出と日の入りの点を定め、一直線に結んで東西を正しく定め、それに垂直な線を引いて南北を正しく定めたというのである。従って、四方位観念は太陽の観測において獲得したものと考えられる。

日始出、立表識其晷。日入復識其晷。晷之両端相直正東西、中折之表正南北。

²⁾ 鈴木由次郎訳本『全釈漢文大系』10 平凡社 1983 年 376-378 頁

（日が始めて出れば、表を立て、その晷を記す。日が入れば復た、その晷を記す。晷の両端の相直なるものは東西を正し、中折の表は南北を正す。）

このように、四方の觀念の獲得は物質的世界への觀察に起源し、経験に基づく平面空間の分類法である。それによって、「四」は平面空間方位の基本数の地位を確立したのである。

次に、中国は「五」を尊ぶ民族だということである。その理由は一般に手の指が五本であるということから原始時代に「五」が一つの単位として用いられていたことや、或は数の概念において十以下の、一、三、五、七、九という五つの奇数の中、「五」が真ん中に位置することから、「五」に対して信仰的であることに由来すると言われている。しかし、なぜ「五」が「三」と並んで他の数に比べて格別に神秘視されたか、そして、中国人は従来、世界のどの民族より「五」を尊崇せねばならないのか、その説明は十分なものとは思えない。

「五」は四方と中を合わせた象徴数であり、「中」は単なる空間概念以上の重要な意味を帯びているとすることができる。それは古代の王権の政治的イデオロギーが絶対なる統率の中心を要請していたことと無関係ではない。

『漢書』律歴志に、

天之中数五。

（天の中数は五である。）

とあり、天の中央の数を「五」とするの、「五」が絶対的實在の象徴として信仰されていたであろう。要するにかかる意味に於いて「五」は神聖視されたのである。

「中」の確立によって、四方を王の統率のもとに回帰させるというモチーフは殷墟卜辞に遡る。彪朴氏は卜辞にすでに四方（東南西北）の概念が見られ、農業の豊凶を司る帝より四土（東南西北）が年（穀物の豊饒）を受けるようにと祈祀されていると指摘している³⁾。これはつまり、天下は東南西北の四方に区分され、

³⁾ 彪朴著「陰陽五行探源」『稊考集 中国文化與哲学論集』上海人民出版社 1988 年 361 頁

各方位にそれぞれ方神と呼ばれる支配神がいるということである。

東方を析といふ。南方を夾といふ。西方を韋といふ。北方を匄といふ。(《京》520——龐朴「陰陽五行探源」による)

析、夾、韋、匄は四方の帝であり、そして商が中商と呼ばれ、中商は殷の直接領有する土地である。中央の帝はいうまでもなく、殷人自身の祖先である。要するに殷代には自分(中商)を中央とする五方観念がすでに持たれていたのである。

中は世界の中央に位置し四方に通じてゆき、四方を統率する方位である。また殷代には、鉄井慶紀氏によると、中土にのみ燔祭が行われる⁴⁾。殷人が中土を世界の中央とし、神聖視していたからである。

また『礼記』王制にも「五方の民」についての記述が見出される。五方の民とは中国、夷、戎、蛮、狄であり、中国人が世界の中央に居住しており、以下各々が中国人を囲んで東南西北の周辺地域に住んでいる。自民族を中央にして、東南西北の四方位に異民族を配置するのは自民族の主体性の誇示にはほかならないと考える。

なお、「五」の尊崇は「五行説」の影響と大きなかわりをもつものとされている。その説を論理だて、伝播普及したのは戦国末期の鄒衍と漢代の董仲舒(前176—前104)と劉向(前77—前6)であったが、とりわけ漢代に五行思想は宇宙支配の思想律ともなって、隆盛の最高峰に達した。例えば、孟子の確立した仁・義・礼・智の四徳を漢の大儒董仲舒が新たに「信」を加えて、「五徳」としたと言われている。前漢の典籍『淮南子』天文訓には「中央土也。其帝黄帝、其佐后土、執繩而制四方(中央は土なり。其の帝は黄帝、その佐は后土、繩を執りて四方を制す⁵⁾)」とあり、五行思想との配当により、黄帝は天の五帝の中央に配置され、四方を統べる地位を占めているという。また、秦漢までは四帝を崇拝していたようであるが、漢の高祖劉邦が即位してはじめて白、青、黄、赤の四帝に黒帝を加えて、五帝崇拝を建てたのである。そのことは『史記』封禪書に次のように記載されている。

⁴⁾ 鉄井慶紀著「中国神話の文化人類学的研究」平河出版社1990年 224頁

⁵⁾ 楠山春樹訳本『新釈漢文大系』54 明治書院1979年 137頁

故秦時上帝祠何帝也。対曰：四帝。有白、青、黄、赤帝之祠。高祖曰、吾聞天有五帝、而有四、何也。莫知其説。於是高祖曰：吾知之矣。待我而具五也。乃立黒帝祠、命曰：北畤。

（「故の秦の時は上帝は何帝を祠った」かを問うた。こたえて「四帝、すなわち白・青・黄・赤の祠があります」というと、高祖が言った、「わが聞くところでは天に五帝ありというが、四つ祠があるだけとはどういうことか」と。誰も理由を知る者がなかったので、高祖が言うよう、「わしは知っている。わしが来るのを待って五祠を立てようというのだ」。そこで黒帝の祠を立て、名づけて北畤と言った⁶⁾。）

平面的空間を「中」によって統合する象徴の数である「五」は時代の産物と言えよう。秦・漢の統一国家の確立は統一国家、統一政治の象徴数を要請したのである。それで、「五」は王権による国家支配に相応しい数として登場したのである。

このように「四」は「五」に先立って発生し、「五」は「四」の延長であり、宇宙間に人間たる地位の確立を象徴し、その中なる地位に配当すべく、用意された数である。つまり「五」は聖数として古代人にその宗教的価値を捉えられる数なのであり、「中」と同等に神聖視されたのである。

2.3 「六」と「七」について

『莊子』齊物論に「六合之外、聖人存而不論、六合之内、聖人論而不議（六合の外は、聖人存して論せず。六合の内は、聖人論じて議せず。）」という言葉がある。「六合」は前後左右上下、または天地四方のことを言い、即ち、三維空間の六つの方位を示すものである。『漢書』律歴志の中に「七、天・地・四時・人之始也（七とは、天・地・四時・人の始めなり⁷⁾。）」という言葉があり、天地人という上下垂直方向空間における三つの表象を上中下の三つ方位記号に還元し、そして春夏秋冬という四時を水平方向の東西南北四方位に比定すれば、「七」の立体全方位が構築される。

⁶⁾ 吉田賢抗訳本『新釈漢文大系』41 明治書院 1995 年 245 頁

⁷⁾ 阿部吉雄他訳本『新釈漢文大系』7 明治書院 1978 年 172 頁

また、七は六十一（中）の組み合わせも考えられる。それは東・西・南・北・天・地の六合に「中」が中介する宇宙構図である。『管子』五行に黄帝に関する一篇の神話が語られている。

昔、黄帝得蚩尤、而明於天道、得大常而察於地利、得奢（蒼）竜而辨於東方、得祝融而辨於南方、得大封而辨於西方、得後土而辨於北方。黄帝得六相、而天地（下）治、神明〔之〕至〔也〕。

（昔、黄帝は蚩尤という臣下を得て、天道に明らかに通じるようになり、大常という臣下を得て、地利を明らかに知るようになり、蒼竜という臣下を得て、東方地域の事情に通じるようになり、祝融という臣下を得て、南方地帯の事情に通じるようになり、大封という臣下を得て、西方の事情を精通し、後土という臣下を得て、北方の事情ををわきまえるようになった。黄帝はこれら六人の大臣を得たことによって天下が治まるようになったわけであるが、これは神明の働きがそこにあったのである⁸⁾）

この神話において、明らかなように、「六」は天地東西南北という空間宇宙区分数として用いられる数であり、「七」という数は黄帝の聖なる中心定位を表象するために用意されたものである。黄帝は「六合」の中央に鎮座しながらも、不動の中心、統治支配の中心として、その統合力を放射線状に「六合」(宇宙全域)に広げていく。そして、六人の臣下は天地東西南北の周辺に止まりながらも、絶対的な中心「黄帝」に仕え、それへ帰属していくのである。神話的世界像にはこのような宇宙論的摂理が込められているのである。

2.4 「八」と「九」と「十」について

八は四の再分割であり、「八方」というまでもなく東・西・南・北とその中間の方位東北（北東）・東南（南東）・西北（北西）・西南（南西）とを合わせたものである。そして「九」は「八」に中の觀念を強く浸透させた数であり、「五」、「七」と同様に中が世界の中央に位置し、どこにも通じていき、世界を統合する

⁸⁾ 遠藤哲夫訳本『新釈漢文大系』43 明治書院 1989 年 758 頁

象徴の数である。

殷・周の時代に井田という土地制度が実施されたという。田地一里四方を井の字形に九等分し、周囲を八戸に分け与え、中央を公田として共同耕作し、その収穫を租税として納めるきまりのことである。『孟子』滕文公下からその土地制度の意図を窺い知ることができる。それによると、公田の仕事が終わってから、私田の仕事をする。公事と私事をはっきりさせるのは「君子」と「野人」とを別ち、上下尊卑の義を明らかにする所以であるということである。公田とは朝廷の象徴であり、井の字形の中央に位置し、周囲八方の「野人」は「君子」への服従の念を思い起こしながら、耕作に従事しなければならなかった。このようにして、王権の絶対なる支配力は被支配者として民の日常的営みにまで浸透させようとするのである。この土地制度は正しく自己を中心とする王権政治の縮図であろう。

『淮南子』天文訓には九野説が述べられている。「九野」とは天の九種の区分であり、それは「九天」とも称され、そこに、天の中央と東・東南・南・西南・西・西北・北・東北八方のそれぞれの方位に応じた天の名称を与え、即ち、中央を鈞天、東方を蒼天、東北を變天、北方を玄天、西北を幽天、西方を顓天、西南を朱天、南方を炎天、東南を陽天としている。九野説は早く秦『呂氏春秋』有始覽に見え、そこでは、天の九野と地の九州とが併記されている。九天の中、中央の均天を首位に置くということは、中国を統一する前の秦が中央政権の地位を固めようとする意図を覗かせている。

また、九州とは中国全土を分けて、九つの州としたものである。『周礼』夏官、職方氏には、揚州、荊州、豫州、青州、衞州、雍州、幽州、冀州、並州の九州が見え、それぞれ東南、正南、河南、正東、河東、正西、東北、河内、正北に位置するとし、豫州は今の河南省のことであり、そこは他の八州の中央に位置している。それ故、中州とも言われている。明らかにこの行政上の九分法は八方「中」を囲み、「中」を際立たせたものである。

なお、九州は中国の外に、別に八つの区域を加えた構図でもある。『史記』孟子荀卿列伝には、

以為儒者所謂中国者、於天下乃八十一分居其一分耳。中国名曰赤縣神州。赤縣神州内、自有九州、禹之序九州是也、不得為州数。中国外如赤縣神州者九、乃所謂九州也。

(一般の儒者がいう中国とは、ただ天下の八十一分の一の大きさに

しか過ぎない。中国は赤縣神州と呼び、赤縣神州の内にはそれ自ら九州がある。以前禹が画した九州がそれである。それは彼のいう「州」の数には入らない。中国の他に、赤縣神州のようなものが九つあって、これこそが彼がいういわゆる九州である⁹⁾。

とあって、「中国外如赤縣神州者九」について『史記補注』では「九」は「八」に作るべきであり、中国と合わせて九つとすべきであるという。『詩経』大雅、民勞の「恵此中国、以綏四方（此の中国に恵みを与え、よって四方を安定させる。）」の「毛伝」には「中国、京師也（中国は首都である）。」と言うように、中国とは元來国の政治的中心、即ち王城、周囲を統治する王権の所在地を指した概念であった。上古の時代、華夏族は黄河流域の中流に国を興し、自らが天下の中央に居ると思っていたので、中国と自称し、他の地域を四方と、他の部族を四夷と呼んだという。夏、商、周には他の諸侯国は中央王権に臣伏した族であった。戦国時代の戦乱を経て、中国境内の各諸侯国は統一に向かい、中央集権の封建専制の秦漢帝国が誕生した。そこで、「中国」は都城としての意味が消失し、それにともない、天下の四方八方の帰属の中心、即ち、空間上乃至政治上の統率力の中心という重要な意味と機能を担ったキーワードへと、変わってしまったのである。

一方、「九」は天地人（上中下）の象徴の数「三」の二乗から導かれ、「三」の二倍で「三」の強めになるというパターンも考えられる。修辞法で掛け算は元の数の力を増強させる機能を持つのである。例えば、「三思」と同じ語意の言葉として、「九思」という語がある。

願加九思、不遠迷復焉。『抱朴子』論仙

（九思【深い思い】を加えて、遠い迷いをくり返さないように。）

「九思」は「三思」と同じように、ぴったり九回考えるのではなく、要するに、語感の範疇に属するある種の修辞法である。当然ながら「九思」は「三思」よりニュアンスと重みが増強し、「三思」よりも周到に考えて、深く熟考し、洞察することである。

さらに、「九」の二乗の八十一は数の極限を意味し、掛け算も「九九八十一」

⁹⁾ 水沢利忠訳本『新釈漢文大系』89 明治書院 1993 年 7 頁

どまりである。同時に、「九」の二乗の八十一は陽を極めた数であるゆえに、聖数の究極を示す数である。空想上の神獣、後に天子のシンボルまで担っていた竜は、「其の背に八十一鱗有り、九九の陽数具わる¹⁰⁾。」とあるように、八十一の鱗は竜または天子の神としての属性の強めに用いられるにはかならないであろう。

一方、最大の基数の「十」はどうであろう。「十」は経験によって培われた数感覚であると考えられ、現実感覚を大事にする中国人の経験意識に於いて、両手の指で間に合う「十」の数も当然承知していたのであるが、九は陽数の極限であるという観念論のほう結局のところ優位を占めるようになったのであると考えざるを得ない。こうした観念尊重の姿勢を取るのが中国伝統文化の一側面であろう。

3 統合、生成原理の根源の象徴数としての「三」

宇宙空間への分割にはいろいろな型があるが、二分割と三分割はあらゆる分割法の基本を成しており、従って、分割された宇宙空間の枠組は二極構造と三極構造がその最も基本的なものである。そして、それぞれの局部空間は副次的な分割項を重ねて細分割されると、そこに偶数構造と奇数構造の系列が生まれる。偶数構造の系列において、二分割によって分割された空間は垂直方向の天地に、四分割は水平方向の四方に、六分割は天地軸と四方軸を合わせた六方に、八分割は八方にそれぞれ対応し、しかも、原理的には、宇宙空間をどこまでも細分化していく。それと同じように、奇数構造の系列は「中」を保持しながら、三分割、五分割、七分割、九分割によって、限りなく細分化していく宇宙空間システムである。しかし、人間の思惟の発展につれて、分割が細分化することによって、構造が複雑化していても、原理的にはそれらはすべて二極構造と三極構造に還元することができ、この二つの構造は人間の空間思考の最も基本的形態が概念化されたものであると思われる。さらに偶数構造列と奇数構造列を比べてみると、前者は常に均等に分割されるのに対して、奇数構造列には常に分割が不可能な「中」に対応する「一」を含めているという違いが出てくる。奇数構造列は偶数構造列に「中」という要素を加えたものであり、中心存在型の世界観であると言える。この場合の「一」は混沌未開と呼ばれる原初の状態を象徴する数としての「一」と

¹⁰⁾ 宋・羅愿著『爾雅翼』釈龍

は異なり、それはつねに単一のままとどまりながら、そこに一貫してつきまとうイメージは中央に位置するコスモスの根本である。

そして、三極構造は二極構造とは異なる原理に基づく意識構造である。二極構造の原型とも言うべき易の陰陽相対的思考は一、--という二種類の符号を用いて、森羅万象あらゆるものを二分するが、天地間の物象を象徴する八卦（☰乾・☷坤・☳震・☴巽・☵坎・☶離・☲艮・☱兌）は陽爻一と陰爻--を三本ずつ組み合わせて表示されており、その「三」は天地人を象徴し、正確にいうと、天地の「二」とそれに交わる人の「一」を加えた象徴的数である。天地の中に位置する人は天地・陰陽を調和する役割を担っている。卦の六爻のうち、中を得ている爻は調和し、不中の爻は調和しない。そして、その調和不調和に対応して、美辞或いは戒辞が繁けられている。これによって不調和から調和に至らしめようとする意図が窺える。つまり易は与えられた運命にいか「中」に基づいて対処すべきかを教えるものである。それがために易では「時に中する。『中庸』朱子章句第三章）」ということが強調される。易の哲学の根底には、すべての事物や、現象は相反する二つの要素の対立から統合への過程であると見る世界観がある。この統合は二極構造への統合であり、統合の実現にはさらにもう一つの媒介極「中」が加わり、三極構造の形をとらなければならないのである。このように、二極構造は分割的機能を持つものに対して、三極構造は統合的機能を持つものと見なければならないであろう。なお、同じ原理は他の奇数構造と偶数構造との関係にも体现しているようである。四分割、六分割、八分割は次第に全空間を細分化していくと同時に、そのように細分化された空間統合の根源の中心定位にますます周密な参照対象システムを与えることになる。そして、中心定位が完成すると、それぞれの空間区域はやがては中心の「一」の下に統合されていく。従って、偶数構造は常に分割原理を果たすのに対して、奇数構造は常に偶数構造への統合原理を果たすのである。その上、あらゆる奇数構造に見られる統合原理はすべて三極構造を基本としており、他の奇数構造は三極構造の延長と発展であると思われる。

三極構造の統合原理は古代中国の宇宙生成論にも反映している。次に『老子』四十二章の「道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。」の三極構造との結びつきを検証してみよう。

「道」と「一」の意味するものは別の機会に論述することにし、ここにおける「二」は陰陽二気と見るのが普通であるが、「三」については様々な説があり、鉄井慶氏によれば、日本では、狩野氏の如く陰陽二気の和合した状態とみるもの、

大浜氏の如く陰陽二氣と沖氣とみるもの、阿部吉雄氏の如く沖氣とみるものに大別されるという¹¹⁾。高亨の『老子正詁』には「三」とは陰氣、陽氣、沖氣だとされ、大浜氏の説はこれに一致する。ここでは陰氣、陽氣、沖氣の解釈に基づいて、少し補足的な見解を述べてみたいと思う。というのは他の説のように、もし「三」が陰陽二氣の和合した状態、或いは「沖氣」だけを意味するなら、「二」の存在が必然的に消失し、「三」という数は成り立ちにくいと考えられるからである。

老子の上記の言葉は「万物陰を負ひて陽を抱き、沖氣以て和を為す。」へと続くが、これは、万物は負的方向性を持つ陰氣と正の方向性を持つ陽氣、そして、両者の正負を調和する沖氣、これらの三氣から構成されているという意味である。その為、老子は「三は万物を生ず。」というのであろう。この宇宙生成論にこの「沖氣」を中心とする三極構造の統合原理が働いており、この三極構造の枠組みが哲学者の老子の基本的思考パターンであると考えられる。

なお、「沖」の初意は白川氏の『説文新義』には「沖虚の義とするものである。」としている¹²⁾。従って、沖氣とは沖虚なる氣のことである。凡そ調和をもたらすものは対立するいずれのものにも偏重しない中性、虚心でなければならない。「万物陰を負ひて陽を抱き、沖氣以て和を為す。」の沖氣は、陰陽兩氣のいずれにも偏しない中性的な虚氣、即ち沖虚を意味する氣のことである。また『老子』四章の「道は沖にして之を用ひる。」の河上公注に、「沖、中なり。」とあるように、沖は中心の氣を意味することと考えられる。なぜなら、対立する陰陽を統一和合するのは超越的な中心であるからである。

「沖氣」の「一」は「一」には変わらないが、陰陽兩氣のバランスを保ち、調和をもたらす生命のエネルギーの中核であるから、単純な「一」と理解すべきではないのではなかろうか。

『老子』十章には、「營魄に乗じて、一を抱き、能く離れしむること無きか。」というが、營魄とは精神と肉体の「二」であり、つまり、両者を調和する「沖氣」の「一」をしっかりと抱いていれば、心身を分裂させないでいられるというのである。また同書三十九章には、「天は一を以て清きこと無くんば、將た恐らくは裂けん。地は一を以て寧きこと無くんば、將た恐らくは発れん。」とあるように、宇宙は「一」が天地のバランスをとることによって成立しているから、天地が

¹¹⁾ 鉄井慶紀著 前掲書 315頁

¹²⁾ 白川静著『説文新義』巻11 水部 五典書房 1976年 35頁

「一」による調和を失った時は、崩壊の危機に直面するというのである。明らかに「一を抱く」が『老子』の根底を流れる思想である。

老子の宇宙生成論では、なぜ万物の生成数として「三」にこだわるのか、それは「三」に至って、はじめて「沖氣」を中心に陰陽兩氣を配した三極構造が完成し、沖氣が陰陽二氣に調和をもたらし万物が生成していく条件が整い、そして万物は万物として存在し、機能することが可能であるからであろうと考えられる。従って、この宇宙生成論の図式乃至老子思想の基本的パターンは三極によって構築されるのであり、「三」はそれを象徴する数であると言える。

4 まとめ

数には奇数と偶数の二種類しかない。物理的宇宙空間は常に偶数によって分割され、しかも、 $2 \rightarrow 4 \rightarrow 6 \rightarrow 8 \cdots$ のように細分されていくのである。一方、奇数は例えば、九 ($9 = 4 + 1 + 4$) のように、中央の「一」は分割不可能である。奇数は等分に分割できないから、決して分割してはならない、「中」の意味する統一体を象徴する数に適合するのである。そして、この分割できない「一」は単に数を揃えるという計量的ものだけでなく、「中」を示す文化的記号である。

『周礼』の冒頭の言葉は、「惟王建国、辨方正位（惟れ王の国を建つるに、方を辨じ位を正す。）」である。つまり古代国家を創立するに当たって、真っ先にやらなければならない大事は朝廷王宮の中心定位を完成することであるというのである。中心定位は単に地理的な優勢を示すのみならず、自己主体性の顯示、世界の王者への帰属、コスモスの確立など、精神活動においても、重要な意味をも持つ。「中」は宇宙観念の根幹にかかわるかくも重要な意味と機能を担ったキーワードである。あらゆる数のうち「三」は「中」の概念を示す最も基本的な単位数なのであり、中国古代思想の根源を象徴的に再現する数なのである。これが中国人が古来より「三」を尊崇し、愛用する所以であろう。